

# 「星の王子さま ～かつて子供だった大人たちへ」

原作

「The Little Prince」

Antoine de Saint-Exupéry (1943)

翻訳・脚色

伊藤さやか

※ 「星の王子さま」というタイトルは内藤濯氏の考案によるものです。

飛行士/子供

王子

花

花の香り

へび

キツネ

通信士

語り

大人たち

バオバブ

花の芽たち

五千のバラたち

砂漠の幻

---

## 第0場 To Leon Werth

### ♪メインテーマ

「この本を、レオン・ウェルトに捧げる。

この本を読んでもくれる子供たちよ。

この本をある大人に捧げることを、どうか許してほしい。

これには深い訳がある。

彼は、この大人の方は、私の世界で一番の友だちなのだ。

もう一つ、言い訳できる。

この大人の方は、何でも理解できるのだ。子供の本だって。

三つ目の言い訳だってある。

彼は、フランスで寒さとひもじさの中、暮らしている。

慰めが必要だ。

でも、もし、こんな言い訳を全部あわせても足りないのなら、私はこの本を、むかし子供だったころの、この大人の方に捧げたい。

大人はみんな、かつて子供だったのだから。

大人のほとんどは、それを忘れていてるけれど。

そうだ、こう書き直そう。

『この本を、小さな男の子だった頃のレオン・ウェルトに捧げる』

1943年 アントワヌ・ド・サンテグジュペリ」

---

## 第1場 墜落

サハラ砂漠上空

飛行士 こちらJP1953機。どうぞ。

通信士 こちらカップ・ジュビー。通信確認を始めます。1、2、3。

飛行士 4、5、6、

通信士 はい、ばっちりです。

飛行士 サハラ上空、視界良好。

通信士 南西15度、海上に気になる雲が出てます。

飛行士 了解。あ、そうそう、南米に転属になった新人、覚えてる？なんかポエム書いてたヤツ。

通信士 小説じゃないですか？

飛行士 あ、そうそう。あいつ、現地の金持ちの娘と結婚したんだって。

通信士 確か、先月でしたね。

飛行士 あのネクタイのセンス、南米ではアリなのかね？

通信士 こちらでは、あまりモテてる様子はありませんでしたからえ。

飛行士 (笑って) ねえ。なんか、新居がすごいらしいよ。義理の父親がバブルがはじけた時に買い叩いたらしくて、

通信士 羨ましいですね。

飛行士 今は買った時の30倍って、

(飛行機が大きく揺れる)

通信士 今の、なんですか？

飛行士 ...なんでもないと思うんだけど、

通信士 今の音、

(再び飛行機が傾く。なんとか軌道を修正しようとする飛行士)

通信士 どうしました？

(飛行機はバラバラになり、飛行士は機外へ投げ出される)

(飛行士は子供に戻り、大人に囲まれる。それを後ろから見守っている語り役)

---

## 第2場 象を飲みこんだボア

飛行士が生まれ育った屋敷

子供 (床のボアを指差し) ねえ、これ何に見える？

語り その子は子供だった。子供だったから、どんなものでも描くことができた。

子供 ねえ、これ何に見える？

語り その子が描いた、世にも恐ろしい、けれど素晴らしい絵を見て、大人たちは言った。

大人1 うーん...帽子？真ん中がふくらんでいるし、

大人2 茶色いし？

子供 とってもとっても怖いんだよ！

大人3 うーん...

子供 よく見てよ！怖いよ！ボアだよ！

大人4 ボア？

子供 ボア・コンストリクターだよ！！

語り その子供は「驚異の大自然」という本で、ボア・コンストリクターという大きな蛇が象を丸のみにする絵を見た。そして、自分でも描いてみたのだ。

子供 ボアは象をかまずにのみこむんだ！だから、象は半年、ボアのお腹の中でゆっくりゆっくり溶けていく。ボアは半年、じっと眠って、象を消化していくんだ！

大人5 でも、その象が、描かれてないじゃない。

子供 だって、ボアのお腹の中にいるんだもん！

語り 大人たちは、ボアの中にいる象を見るができなかった。

いちいち説明しなきゃいけないのに疲れたので、その子は結局、絵を描かない仕事を見つけることにした。

飛行士 世界中の空を飛び、いろんな人に会った。昔はちょっと頭の良さそうな人に出会うと、象のみこんだボアの絵を見せていたけれど、誰もお腹の中の象は見えなかった。最近はネクタイや政治の話をすることにしている。そうすると大人は、自分と同じように話がわかる人間に出会えたと、満足するから。

象は今も、ゆっくりゆっくり、ボアの中で溶けている...

---

## 第3場 羊の絵を描いて

サハラ砂漠にて

飛行士 墜落の最初の晩、私は人が住んでいるあらゆる土地から千マイルも離れた砂の上で眠りについた。大海原の真ん中をいかだで漂っている人よりも、ひとりぼっちだった。砂漠の真ん中で、生きるか死ぬかという時、私はあの一小さな王子さまに出会ったのだ。

(飛行士、バックパックからランプを取り出し、周囲を照らす。ランプの光が誰かの足を照らしているのに驚き、ランプを掲げる)

王子 かたじけない。羊の絵を描いて。

飛行士 はい？

王子 かたじけない。

飛行士 はい。

王子 羊の絵を描いて。

(王子、飛行士に紙とペンを差し出す)

飛行士 ...はい。(絵を描きながら) えっと...絵を描くのは、子供の頃にあきらめて、だから、絵は、これしか描けなくて...(飛行士、申し訳なさそうに絵を見せる)

王子 そ、そんな怖いへび、いらぬ！それに、それ、象がかわいそうだ！羊！羊の絵を描いて！

語り 突然あらわれたその子供は、ボアの中の象を見ることができた。

王子 羊の絵を描いて！

(飛行士、自信なさげに絵を描き始める。羊が元気なさげに「メー」となく)

王子 だめだ！そのヒツジはもう治らない病気にかかっている！

(飛行士、再び絵を描き始める。気性の荒そうなヤギが「メエエエエ」となく)

王子 それはヤギだ。

飛行士 羊だよ！

王子 ヤギだよ。羊の絵を描いて！

(飛行士、しばらく白紙とにらめっこをし、そして乱暴に箱を描く)

飛行士 坊や、よく聞いて。これは、箱です。君がほしがっているヒツジは、箱の中にいます。

(王子、箱の絵をしげしげと見つめる)

王子 この羊！この羊だよ！ねえ、この羊は、草をたくさん食べると思う？ぼくのところ、とても小さいんだ...

飛行士 あー...うん、これはとても小さな羊だから。

王子 そんなに小さいかな...？あつ、眠っちゃった...！

(王子、嬉しそうに箱を見つめながら)

王子 ねえ、君は空から落ちこちたの？

飛行士 まあね。君は？君は、このヒツジを、どこに連れていく気？

(王子、黙って数歩、歩き)

王子 あの箱、夜は羊の小屋になるね。君は、どの星から落ちてきたの？

飛行士 星？

王子 ぼくの星は、とても小さいんだ。

飛行士 どのくらい小さいの？

王子 あの羊、バオバブも食べるだろうか？

飛行士 バオバブ？

王子 大きなバオバブも、はじめは小さい。

---

## 第4場 バオバブ

サハラ砂漠～バオバブに占領される星

王子 バオバブの小さいのは、他の木や花の芽と一緒になんだ。小さくて、かわいい。

(どこからか種が飛んできて、やがて芽吹く。それぞれの芽は、それぞれの言葉で、つたないながらも一生懸命、歌っている。バオバブの芽は小さく可愛い声で「バオバブ、バオバブ」と繰り返し言っている)

(どの芽もすくすくと伸び、花を咲かし、それぞれ好きな歌を歌っている)

(やがて、バオバブは周囲の花を枯らし、枯らされた花はバオバブに同化する。最後はその場の全ての花が「バオバブ、バオバブ」と声高に繰り返す)

王子 これがバオバブだ。バオバブを放っておいたら、取り返しのつかないことになる。バオバブの根は星一面に広がって、その根で星を貫いて、星は破裂しちゃうんだ。

飛行士 要注意だ、バオバブ...！

王子 几帳面にやれば良いんだ。朝、自分の身づくろいをするように、ちゃんと自分の星のお手入れもするんだ。バオバブの小さいのは、バラとそっくりだけど、だんだん分かってくるから、そうしたら、すぐ引っこ抜かなきゃいけない。小さいからって、放っておいちゃいけないんだ！たった3本のバオバブのせいで、取り返しのつかないことが起こった星だってあるんだから。

飛行士 取り返しのつかないこと...？！

(王子、地平線に目をやり)

王子 あ、日が沈む...ぼくね、いつか夕日を44回も見ただ。

飛行士 44回？

王子 うん、ぼくの星は小さいもの。夕日を待たなくていいんだ。座ってる椅子をちょっと動かせば、次の夕日が見られる。

飛行士 へ、へえ...？

王子 夕日が好きになるよね。悲しいと。

飛行士 悲しかったんだ？44回も夕日を見なきゃいけないくらい...自分の星にいたのに...

(王子、何も答えようとしないまま立ち上がる)

飛行士 この王子は、一軒の家と同じくらいの大きさしかない、小さな小さな星からやってきたと言う。これは、私にとってはあまり意外なことではなかった。地球、木星、火星、金星といった名前をもつ大きな惑星のほかにも、望遠鏡で見る事さえ難しいくらいの小さな星が、宇宙にはたくさん存在する。自分の小さな星で44回も夕日を見たこの子供は、自分の星を飛び出し、他の小さな星を、たくさんたくさん、めぐってきたらしい。

---

## 第4場 地理学者の星

地理学者の星にて

地理学者 (王子に気づくが、本から顔を上げないままで) 探検家の方ですか？どちらからですか？

王子 何の本？あなたは何をやっているの？

地理学者 地理学者です。

王子 地理学者って？

地理学者 全ての海、川、街、砂漠の位置を知っている研究者を地理学者と呼びます。

王子 あなたの星はきれい。海は？海はあるの？

地理学者 回答しかねます。

王子 山はある？

地理学者 回答しかねます。

王子 街は？川は？砂漠は？

地理学者 いずれも回答しかねます。

王子 地理学者じゃないの？

地理学者 地理学者ですが？この星には私しかおらず、私は探検家ではありません。そこらへんをぶらついて海だの川だのを見つけるのは探検家の仕事であって、探検家の報告を受け、それを精査、記録するのが、地理学者のつとめです。探検家という職業と比較し、より重要度の高い仕事ですので、地理学者は机を離れるわけにはいきません。探検家の方、遠くからいらしたようですが、あなたのいらした星について報告していただけますか？

王子 はい。ぼくの星には、きれいなバラの花が一輪咲いていて、その花は、

地理学者 花は記録に値しません。

王子 ぼくの星で一番きれいなものなんだ。

地理学者 かりそめのものは記録に値しません。

王子 かりそめ？

地理学者 永続的な存在のみが記録に値します。山の位置が変わることはほぼないでしょう？海が消えることもほぼないでしょう？そういったものが、

王子 かりそめ？かりそめって何？

地理学者 それは、すぐに消え去るおそれが強いものです。

王子　　すぐに...消え去る...

地理学者　おそれが強いものです。

王子　　あの花は...四つの棘があるから、へいきだって...あの花は...たった四つの棘で、この世界から自分を守ろうとしてるんだ。なのに、ぼくはあの花を星に置いてきた。ひとりぼっちにしたんだ。

飛行士　王子はその花のために、44回も夕日を見た。そしてその花のために自分の星を離れ、色々な星をめぐり、こうして地球までたどり着いた。でも王子はその花について、なかなか話してくれなかった。

---

## 第5場　羊とバラの棘

サハラ砂漠にて

(飛行士は機体の修理をしている)

王子　　羊って...なんでも食べる？

飛行士　見つけたものはなんでも食べるね。

王子　　バラも...？

飛行士　バラも食べるね。

王子　　棘があっても...？

飛行士　棘があっても食べるね。

王子　　じゃあ棘は...なんのために棘はあるの？

(飛行士、答えられないので王子の質問を無視して修理を続ける。王子、必死に飛行士に食らいつき)

王子　　どうして棘を持つの？棘があっても食べられてしまうのに！棘はなんの役にも立たないなら、どうして四つの棘を持つてるの？だって、棘は、

飛行士　なんの役にも立たない。バラは意地悪したいから、棘をつけてるんだよ。

王子　　そんなの、信じない！花は、か弱いものなんだ。必死なんだ。花は信じてるんだよ、棘はものすごい武器だって、

飛行士　(飛行機を蹴飛ばし) ああ、もう！

王子　　君は...バラが意地悪だから、棘をつけてるって、本当に...

飛行士　思いつき！そんなの、どうでもいいよ！悪いけど、今、こっちだって、必死なんだよ！子供にはわからないと思うけど、

王子　　大人みたい。

飛行士　...

王子　　君はみんな、ぐちゃぐちゃごちゃごちゃにしてる。

飛行士　...

王子　　何百年もの間、花は棘を持っている。何百年もの間、羊は花を食べ続けている。それでも花は棘を持っているんだ。それは、どうでもいい事じゃない。もし、君の星に、たった一つの、君だけの花があって、でも小さな羊がある朝、それをパクッて...ほんの一口で、君の花を...小さな羊は自分が何をしたのかわからないまま、花を...花を...それを、君はどうでもいいって言



うの?!

飛行士 どうした?

王子 何百万もの星のどれかに、君だけの花があれば、それだけで幸せになれるんだ。君はつぶやけるんだ。この星のどれかに、ぼくだけの花が咲いている、って。でももし羊が花を食べちゃったら、星はみんな輝きをなくすんだ!それでも君は、どうでもいいって言うの?!どうでもいいって、

(王子、涙で言葉が途切れる)

飛行士 あのね、違うんだ、飛行機がどうしても...喉もカラカラで...このままじゃ死ぬって思ったから、どうでもいいって言っただけで...

(飛行士、泣きやまない王子を抱きしめ)

飛行士 小さな王子さま。花は、食べられたりしないよ。まず、羊に口輪をつけよう。かぼつてやつ。あと、花を守るため、フェンスを描いておこうか。あと...あと、君の花は、意地悪じゃないし、絶対に食べられたりしないから...

王子 ぼくの花...

## ♪バラのテーマ

---

## 第6場 花

小さな王子の小さな星にて

(花の種が小さな星に根付く)

飛行士 小さな王子の小さな星に、ある日、どこからともなく運ばれてきた珍しい種が芽を出した。

(王子はドキドキしながら、花に近づく)

王子 君は...バオバブかい?

飛行士 その芽はするすると伸び、大きなつぼみをつけた。王子は花が開くのを楽しみに待っていたが、つぼみはなかなか開かない...その花は、ひなげしみたいにくしゃくしゃのまま出てきたくなかったのだ。

(花は蕾の中で身づくろいをしている)

飛行士 ある朝、ちょうど日の出の時刻...

(花があでやかに開く)

花 (王子に驚いたふりをして) まあっ、お許しくございませ...わたくし、ちょうど起きたばかり

で、まだ花びらのお手入れも終わっていませんの...

王子　きれいだねえ...!

花　　(なんでもなさそうに) ...わたくし? ええ、わたくし、太陽がこの星に現れるのと同じ瞬間に、この星で咲きましたから。

(王子、こわれ物に触れるように、そうっと手を伸ばす。花はその手を棘で刺し)

花　　...ちょっと、あなた。

王子　はい!

花　　わたくし、朝ごはんをまだ、いただいていないのですけれど...

王子　はい!

(王子はすっかりドギマギして、水をくみに行き、花に輝く水をそっと与える)

(花の香りがあたり一面に広がる。王子は生まれて初めて感じる花の香をとらえようとする)

王子　これは...何?

花　　わたくしの香り。バラの香りもご存知ないのね? あなたって、本当になんにもない所で暮らしているんですね。

(王子、恥ずかしそにうつむく)

飛行士　その花を、王子は大切にしていた。とても、とても。でも、時がたつにつれ、ちょっと気難しく高慢な花は、王子を苦しめることが多くなっていった。たとえば、ある日のこと。

花　　ちょっと、ここ、場所が悪いのではないかしら...寒いわ、とても寒いわ。はあ...寒い、寒い...夜くらい何かでおおっていただけないかしら? トラたちがわたくしを襲いに来たら、どうしてくださるの?

王子　この星にトラはいません。

花　　...これから、来るかもしれないでしょう。

王子　トラは草は食べません。

花　　わたくし、草なんかじゃありませんわ。

王子　すみません...

花　　比べてはなんですけどね、わたくしが以前いたところは、もっともっともっと、

王子　.....

飛行士　花がここへやってきた時、花はまだ種だった。この花が他の星を知っているわけがないことくらい、王子だって分かっている。

花　　(わざとらしいせきをして) ...寒い...寒いわ...この身を守るための囲いさえないのね...  
(さらに大げさにせきをする)

(王子、囲いを取りに走る)

(花は今にも死にそうな様子で、大げさなせきをしてみせる。王子は花にそっとボールをかけてやる)

飛行士　こんなことが続き、王子は、だんだん花を疑うようになってしまった。疑いながらも、王子

は、花のなんでもない言葉にふりまわされ、花を大切にしようとするほど、花のせいでどんどん不幸せになっていった。

そして王子はついに、星を、自分の星を、出ることにした。

出発の朝、火山のすす払いをして、バオバブの新しい芽もひっこ抜いて、王子はいつもと同じことを、いつもより少し丁寧にやっていった。そして花に、最後の水をかけてやり...

王子 さようなら。

(花はただ黙っている)

王子 さようなら。

花 ごめんなさい。どうか、お幸せにね。

(ピアノははかなく、優しい音)

花 あなたが好きよ...でも、あなたは、わたくしと同じくらいお馬鹿さんだった...  
(せきをして) こんな囲い、どっかへやって。

王子 でも、それがないと風邪を...

花 風邪なんてひきません。

王子 もしかしたら、虫が...

花 毛虫の二、三匹がなあに？ちょうちょとお友達になるの。毛虫くらい我慢するわ...  
...ちょうちょとお友達になるのよ...あなたが遠くへ行ってしまうから...

(王子、花の囲いはずす)

花 大きな動物が来たって、へいき。この四つの棘があるから、へいきだもの。  
なに、ぐずぐずしてるの。行くと決めたんでしょ。お行きなさいよ！

飛行士 花は、泣いているところを見られたくなかったんだろう。

王子 その時、僕は本当に小さくて、花のことなんて、全然わからなかったんだ。あの花は素敵な香りと美しいきらめきで僕を包んでくれた。でも、あのめちゃくちゃな嘘ばかりが気になって、その向こうにあった本当の気持ちに気づいてあげられなかったんだ。

---

## 第7場 地球

サハラ砂漠にて

飛行士 王さまの星、酔っ払いの星、実業家の星、地理学者の星...色んな星を旅して、王子がたどり着いたのは、地球だった。王子が一番初めて見た地球は、人っ子ひとりいない砂漠。

(王子、砂漠を歩いていく)

王子　こんばんはー...こんばんはー...こんばんはー...こんばんはー...

へび　こんばんは。

飛行士　答えてくれたのは、砂の中で動く、黄色の小さな輪っかーへびだった。

王子　ねえ...地球には誰もいないの？

へび　砂漠には誰もいない。地球は広い。

王子　ぼくの星は、この空のちょうど真上だよ。ほら、あれ...遠いなあ...

ねえ、人間たちはどこにいるの？砂漠では、ひとりぼっちなんだね。

へび　人間の中にいたって、同じ。ひとりぼっち。

王子　君は変な生き物だ...指みたいに細くて...足さえ持っていない。旅もできない。

へび　お前を、運ぶことができる。船よりも遠く、はるか遠くへ。

飛行士　へびは王子の足に、するりと巻きついた。

へび　お前は頼りなげで、かわいそう。どうしても自分の星に帰りたくなったら、ねえ...いつでも助けてあげる。

王子　...

へび　どうしても自分の星に帰りたくなったら...ねえ...いつでも、助けてあげる。

王子　帰りたく、なったら...

(へびは砂漠に消え、王子は気をとりなおし、再び歩き出す)

飛行士　砂と岩と雪の中を歩き、王子はある美しい庭に行きついた。

(庭では五千ものバラがが楽しそうにおしゃべりをしている。バラたちはお化粧をしあい、互いの美しさをたたえ合っている)

王子　君たちは...だれ...？

飛行士　その庭では、五千ものバラの咲き乱れ、その全てが、王子の花にそっくりだった。

王子　君たち...だれ...？

(バラたち、王子を見てヒソヒソ、クスクス)

飛行士　王子は、あの花が宇宙にたったひとつしかないものだと信じていた。でも、この庭ひとつの中に、同じものが五千も咲いていたのだ。

王子　ぼくの花がこれを見たら、きつといやな気持ちになる...ものすごく咳をして、笑いものにならないように死にそうな、苦しそうなふりをする...そうしたらぼくは、それを看病するふりをしなくちゃいけなくなる...そうしないと、ぼくに恥をかかせるために、あの花、ほんとうに死んでしまう。

(バラたち、王子を盗み見ながら、何やら楽しそうに笑っている)

飛行士　王子は、気づいた。自分は、どこにでもあるバラを一輪もっていただけなのだ。

---

## 第8場 キツネ

麦畑にて

飛行士 そこには、一面の麦畑が広がっていた。風が吹くたびに麦がざわめき、さざ波が生まれる。でも、そんな景色も、王子のなぐさめにはならなかった。

(キツネが麦畑から、ひょこっと顔を出しては隠れる)

王子 !

飛行士 王子の心をとらえたのは、麦畑にいた、一匹のキツネ。

キツネ おはよう。

(キツネはまた隠れる。王子、キョロキョロしながら)

王子 おはよう!

キツネ (笑って) どこ見てんのさ。

王子 どこ?

キツネ ここだよ!

王子 君!とてもかわいらしいね。君は、

キツネ キツネってんだ。

王子 ぼくと一緒に遊んでよ。ぼく、すごく...さびしいんだ

キツネ ムリ!そんなことしたら、なついちまうだろ?

王子 そうだよ、ごめんなさい。

キツネ ...

王子 『なついちまう』って、なに?

キツネ 『なに』?!つ、つまりはさ、あれだよ、ほら、うー...絆を作るってことだ!

王子 絆?

キツネ んー...まあ、つまり...どうしても、どうしても、と言うんなら、なつかないでやらないわけでもない!

王子 それはすてきだけど...ぼくは、人間に会って友だちを作らないと。

キツネ ちっこいの!

王子 (自分を指し)「ちっこいの」?

キツネ そうだ、ちっこいの。

王子 君の方が小さいじゃないか。

キツネ ちっこいの、人としちゃ、ちっこいだろ!ボクはキツネとしてはかなり成熟してる。

王子 では、「ちっこいの」でいいよ。

キツネ ちっこいの!人間たちには、友だちを作る時間なんてない!人間は、店で出来あいのものを買うだけだ。でも友だちを売ってくれる店はないから、人間たちには友だちがいない。つまり、ボクになついてもらうほか、ちっこいのが友だちを作るすべはない!

王子 なついてもらうには、どうすればいいの?

キツネ 耐えんだよ！まずは忍耐あるのみ。いいか、こんな感じで、お互いちょっと離れて、草の中に座る。ボクはあんたをチラッと見るだけだし、あんたも何も言わない。何にも！言葉は誤解のもとだ！だから、あんたは毎日同じようにここに来て、同じように座る。でも、ちょっとずつ、ボクの近くに座る。

(王子、キツネに触れようとする)

キツネ ちっこいの！ちょっとずつ、だ！はい、また明日！

(キツネ、王子を追い出す)

### ♪キツネの歌1

キツネ

同じような毎日

追いかけるニワトリも似たり寄ったり

追いかけてくる人間も似たり寄ったり

人間たちの足音が近づくとたんび

ボクは巣穴でちぢこまる

でも今日からは違う あのちっこいのが近づいてくる

その足音は音楽

ボクは巣穴を抜け出して

(王子がやってくる)

王子 なついた？

### ♪キツネの歌2

キツネ

ちっこいの ボクにとって君は 世界中の10万のちっこいのと同じ

ちっこいの 君にとってボクは 世界中の10万のキツネとおんなじ

ま、どうでもいい だろ？

でももし、絆を作ったら？

ボクが君になついたら？

王子 なついたら？

キツネ バイバイ。

(王子、むくれながらも帰る)

キツネ

光が差し込む 灰色の日々に

昨日より今日 今日より明日

(戻ってこようとする王子に)

キツネ バイバイ。また明日！

(王子、仕方なくまた戻っていく)

### ♪キツネの歌3

キツネ

見渡すかぎり麦畑

つままない景色

ボク パン食べないし

だけど金色麦畑 おんなじ色 ちっこいののマフラーと

もし友達になったら 金色は友達の色になる

金色の麦畑 好きになる

(王子、嬉々としてやってくる)

キツネ 早いよ。

王子 こんなに待ったのに？

キツネ 昨日より早いし、一昨日と比べたら、二時間も早い！ほんと、分かってないよなあ。

たとえばさ、毎日、午後四時にちっこいのが来るとする。そしたらボクは三時にはもう嬉しくなりはじめる。そいで四時に近づけば近づくほど、嬉しくなる。四時にはもうソワソワして、心配になってくる。ちゃんと今日も会えるかって。こんな感じで、ボクは幸せってやつを見出すんだ。が！てきとうな時間に来られると、ボクは何時からワクワクし始めればいいのか、分からなくなる。困るだろ！

王子 困るかなあ...

### ♪キツネの歌4

キツネ

ちっこいの ボクにとって君は 世界中の10万のちっこいのと同じ

ちっこいの 君にとってボクは 世界中の10万のキツネとおんなじ

ボクなんてどうでもいい だろ？

でももし、絆を作ったら？

ボクが君になついたら？

王子 なついたら？

キツネ

そしたら秘密をプレゼントする

ちっちゃい秘密

でも すっごい秘密

王子 秘密？

キツネ おうよ。

(王子とキツネ、遊びまわっているうちに、バラたちが咲き乱れる庭園に迷い込む)

(バラたち、相変わらずヒソヒソクスクス)

キツネ なんだよ、ちっこいの。どうした？

王子 ぼくの花は...自分のことを、この宇宙でたった一つのバラだと言った。ぼくはそれを信じてたんだ。でも地球には、こんなにたくさんのバラがあった...

キツネ 同じバラ？

王子 同じ色、同じ形、それがこんなにいっぱいあるんだ！ぼくの星は、小さくて...何もなくて...

♪きつねと飛行士の歌

飛行士

ある朝バラが君の星に咲いた 香りが君をつつんだ  
水をやり虫をとり  
機嫌も 時間もいっぱい取られた

キツネ

そのいっばいの時間  
あの花を君だけの花に変えた

キツネ

その花は 特別な花

飛行士

君は夕日を見た 44回

キツネ

星を探す あの花のいる星

キツネ・飛行士

あの花は君の花だから

王子 あの花たち...ぼくの花とは、全然ちがう。あの花たちは、まだ、ぼくに会う前の君と同じだ。十万もの他のキツネと同じだった君と。ぼくのあの花だって、通りすがりの人が見れば、他の花たちと同じに見える。だけどぼくには、世界中の花たち全部より大切なんだ。...ぼくがガラスのケースに入れてやったから...毛虫をとったのも、ぼくなんだ。苦情を聞いてやったのも、自慢話を聞いてやったのも、ぜんぶぜんぶ、ぼくなんだ！あの花は...ぼくの花なんだ！

キツネ そのバラがちっこいのになついていたのなら、そのバラを忘れちゃいけない。永遠に。

王子 あの花...とっても弱い花なんだ...たった四つの刺しかないのに、それで世界から自分を守ろうとしているんだ...

キツネ ...

王子 ぼく、行かなくては。

キツネ あー...泣いちゃうなー。

王子 君はどうして、ぼくになついたの？お別れしたら、何も残らないって...分かってなかったの？

キツネ 残らなくないだろ？

♪キツネと飛行士の歌2

キツネ

見渡すかぎり麦畑  
同じ色 ちっこいののマフラーと

飛行士

その金色は思い出



キツネ  
ボクたちだけの思い出になる  
金色の麦畑 好きになった

飛行士  
麦の穂 ゆらす風も

キツネ・飛行士  
光があふれる 灰色の日々に  
今年も来年も再来年もずっと

キツネ  
ちっこの 君にとってボクは 世界中で一匹だけの 特別なキツネ

飛行士  
王子さま キツネにとって君は 世界中でただ一人 特別なちっこの  
君を変えた 友達に

キツネ  
君はボクになついたのさ  
今から秘密をプレゼントする  
ちっちゃい秘密  
でも すっごい秘密

心だけがちゃんと見てる  
目じゃ見えないんだ 大事なものは

王子 大事なものは目じゃ見えない？

キツネ さようなら。

王子 さようなら。

(キツネ、去っていく)

---

## 第9場 砂漠の井戸

サハラ砂漠にて

(王子と飛行士が砂漠に座っている)

王子 ぼくは、キツネと友達になれて、本当に嬉しかった。

飛行士 うん...

王子 そうだ、地球で見た列車の話を、まだしてなかった。君は列車を知っているかい？列車はね、人間を束にして運ぶんだ。人間は急いで右に行ったり、左に行ったりする時に、列車に乗る。色んな列車に、次々にね。いつも、自分のいるところが気に入らないみたい。

(飛行士、両手で顔をおおう)

王子 人間は急いで移動するために列車に乗ってるのに、列車の中で寝るかあくびをするかしてるんだ。子供だけが、窓に鼻を押し付けて、世界を見てる。

飛行士 熱があるかも...

王子 子供たちだけが、何が欲しいかを知ってるんだ。

飛行士 ...

王子 ぼくのキツネも言っていたよ、人間は毎週木曜日になると、

飛行士 もう...キツネの話はいい。死ぬんだ。喉が渴いて。

王子 死にそうだったとしても。友達を持つというのは、いいことだ。ぼくはね、キツネと友達になって、本当に嬉しかったよ。

飛行士 王子さま、喉が渴いたことはある？ 飢餓状態になったことは？ 飛べなくなったことは？

王子 ...

飛行士 ...わからないよね？

王子 井戸を探そう。

飛行士 は！井戸を探す！井戸を探して、あてもなく、ただ、ただ、さまよう！この果てしない砂漠を！

王子 あのね...水はたぶん、心にもいいんだ。

(王子、飛行士に手を差し出して、飛行士を立ち上がらせる)  
(砂漠の幻が浮かび上がる)

幻1 王子と飛行士は歩きだしました。

幻2 気づけば、星が輝いていました。

飛行士 のどの渇きで少し熱のあった私は、夢の中で見るように、それらの星をながめ、そして、

幻3 歩いて、

幻4 歩いて、

幻5 歩いて...

(砂漠の幻は「歩いて。歩いて」と口々に言いつづける)

王子 あのね...星がきれいなのは、そこに見えない一輪の花があるから。砂漠がきれいなのは、どこかに井戸を隠しているから。

飛行士 子供の頃、古い家に住んでた。その家には秘密の宝が隠されてる、って言われてて...

### ♪飛行士の歌～井戸の歌

飛行士

誰一人 見たことなんてないんだ 秘密の宝物なんて

それでも探さずにはいられなかった 秘密の宝物

幻

宝物の物語

飛行士

あの家に特別な魔法をかけた

飛行士・幻  
不思議な輝きに満ちて

幻  
あの家も  
星空も

飛行士  
この砂漠も

幻  
金色の砂漠  
井戸を隠している

飛行士  
美しさ

飛行士・幻  
生み出すものは

飛行士 目には見えない

王子 ぼくのキツネの言葉、君にもわかったんだ

飛行士・幻  
目じゃ見えないんだ  
大事なものは

飛行士 一輪のバラの面影は、ランプの炎のように、王子のうちに輝いている... ひと吹きの  
風が、それを消してしまわないように、私は歩いて、歩いて、歩いて、歩いて...

(砂漠の幻、「歩いて、歩いて」と声を重ねていく)

飛行士 夜明け...ひとつの井戸を見つけた。

王子 こういう水が、飲みたかったんだ。

飛行士 星空の下をさまよった時間、滑車の歌...その水は、特別な日の贈り物のように心地良いもの  
だった。

王子 この星に住む人たちは、一つの庭で五千のバラを育てることができる。なのに、自分が探し  
ているものが何か、見つけることができないんだ。探しているものは、たった一輪のバラの  
花や、ほんの少しの水の中にあったりするのにな。

飛行士  
心だけがちゃんと見てる  
目じゃ見えないんだ  
大事なものは

---

## 第10場 別れと帰還

サハラ砂漠～サハラ上空

飛行士 夜明け時。砂漠の砂は、はちみつの色。優しいその色を見て、私はうっとりとした。

王子 ぼくが地球に落ちてから、ちょうど一年になるんだ、明日...明日で一年なんだ...

(飛行士、王子の様子がいつもと違うことに気づく)

王子 ねえ、君はもう、飛行機のところに戻らないと。あのね。今夜は来てはいけないよ。

ぼくは...ちょっと、死んじゃうみたいになってしまうかもしれない...それに、あれが君を面白がって咬んだりしたら、大変だ...

飛行士 「あれ」？

王子 君は、飛行機のところに戻らないと。

飛行士 あ、ああ、修理しないとね。

(王子、飛行士に手を振る。飛行士、ためらいつつも歩き出す)

飛行士 キツネのことを、思い出した。なついてしまうと、なんだか泣きたくなる時がある。

(王子、羊の箱の絵をそっと取り出し)

王子 あの花...とっても弱い花なんだ...たった四つの刺しかないのに、それで世界から自分を守ろうとしているんだ...ぼくは、あの花にヒツジを届けなきゃいけない。君の描いてくれた、ヒツジを。

飛行士 不思議なことに、飛行機は直った。私はこのニュースを、王子に伝えずにいられなかった。

(ヘビが王子の足元にやってくる)

王子 (ヘビを見つめて) ねえ、君の毒は、いい毒かい？長く苦しめないって、絶対に言える？

(ヘビが鎌首をもたげる)

王子 まだだよ。まだ、星が戻ってない。一年前と同じ場所に。

(王子は空を見つめる。そんな王子を飛行士が見つけると、ヘビは砂に消えていく)

飛行士 王子！王子、すごいんだ！信じられないと思うけど、

王子 飛行機が直ってよかったね。

飛行士 ！

王子 これで、君は君の場所にもどれる...ぼくも、今日、ぼくの場所へ帰るんだよ...君の場所よりもっと遠くて...もっと大変で...でも、帰るんだ...

飛行士 帰るって...どうやって...？

王子 ねえ、夜には星空を見てね。ぼくの星は小さすぎて、どこにあるか、教えることが出来ないけど...けど、そのほうが良いんだ。君にとって、ぼくの星が、ぜんぶの星のひとつになるから。ぜんぶの星が、君の友達になるよ。どの星もただ黙っているだけだけど、君はぼくを知っているから、君は自分だけの特別な星を持つことになる。

飛行士 わからないよ...私には、わからない。

王子 夜、君が空をながめる時、ぼくはそれらの星のひとつに住んでいて、そのひとつの星で笑っている。でも、君はそれがどの星か分からないから、君にとっては、ぜんぶの星が笑っていることになる。

飛行士 王子...？

(王子、笑って羊の箱の絵をかかげて見せる)

飛行士 王子のくるぶしのそばに、黄色い稲妻が走るのを見た。私のポケットにはピストルが入っていたのに、そのヘビを撃つことも、王子にかけよることも、出来なかった。

(王子の姿が消える)

飛行士 砂の上だったので、音もしなかった。

(飛行士は、修理の済んだ飛行機に乗り込み、サハラ砂漠を飛び立つ)

飛行士 私の飛行機は、墜落したのが嘘のようによく飛んだ。

通信士 JP1953機、応答せよ！JP1953機！

飛行士 王子が、自分の星にもどったことは、良く分かっているつもりだ。夜が明けた時、彼の体はどこにもなかった。

通信士 JP1953機、応答ねがう！JP1953機！

飛行士 こちら、JP1953機。ただいま、サハラ上空。

通信士 ...こちら、カップ・ジュビー。今まで何してたんですか？

飛行士 ちょっとトラブルがあって。今、予定航路を順調に飛行中。

通信士 死んだと、思われてましたよ。同僚の皆様方に。

飛行士 まあ、そうだね。すみません。あ、そうそう、何を話してたんだっけ？なんかの話の途中だったよね？あ、家の値段が30倍？

通信士 何を見ましたか？

飛行士 ...

通信士 砂漠で、何を見ましたか？

飛行士 ... (笑って) 見えない。目じゃ見えない。大事なものは。

通信士 心だけが、ちゃんと見てる。

(驚く飛行士)

通信士 飛べなくなって、死にそうになって、何かを見つけて戻ってきたのは、あなたが一人目ではありませんから。知らなかった？

飛行士 ...

通信士 誰にもなつかないから、噂話と不動産の話しかできないんですよ。（笑って）あと、ネクタイの話？

飛行士 もし...

通信士 はい。

飛行士 もし、いつか、砂漠で子供を見つけた飛行士がいたら、その子が、よく笑う子で、人の質問は無視するくせに自分の質問にちゃんと答えないと泣いたり怒ったりする子だったら、教えて欲しいんだ。

通信士 わかりました。

飛行士 彼が戻ったことを、教えて欲しいんだ。

♪メインテーマ